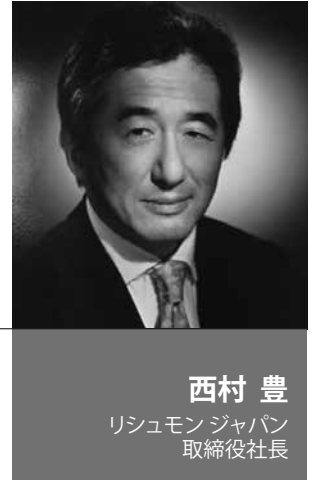




津坂 純
日本産業推進機構
取締役社長・創業メンバー

経済同友会 つながる▶▶
リレートーク
#211

美しき敗者？



私のオタク度が高いものに、サッカーのワールドカップ、アメリカンフットボールのスーパーボウル、加山雄三の若大将シリーズがあります。ワールドカップは、1970年メキシコ大会以降を鮮明に記憶しています。特に印象に残っているチームは、1974年のオランダと1982年のブラジル。どちらも優勝できなかったチームですが、自らのチーム哲学を貫き、美しく攻撃的なサッカーで世界中のファンを魅了し、美しき敗者とたたえられました。

サッカー以外にも、昔、ドラマで聞いたこんなセリフが印象に残っています。「一度の後悔をしたくないから、10回失敗するかもしれない」。これも同じような美学なのでしょうが、しかし、実際の経営においてこの美学は危険です。やはり、あらゆるリスクや可能性を検討し、最善の経営判断を行い、そして実行していく。たとえそれが美しく攻撃的な選択肢ではなかったとしても。経営においては、10回の失敗は通常許容されないでしょうから。

以前に読んだ『リーダーの悪い癖』という本には、悪い癖の一つとして“自分らしさへのこだわり”と書かれていました。必要なのは“自分らしさ”ではなく、冷静に最善の判断と行動をすることです。“後悔したくないから自分らしくいこう”とは、まさに悪い癖そのものです。人前で話をするとき、この悪い癖として私が例えるのが、野球のピッチャーのセリフ。「自分は速球投手だから真っすぐで勝負しました。変化球を投げて打たれた、と後悔したくないから」。プロの仕事は、自分らしさを貫いて突進することではなく、そのときの最善の判断結果が“カーブの方が打ち取れる確率が高い”と思えば、冷静にカーブを選択し、勇気をもって投げる胆力だと思います。プロの仕事は“カッコよさ”ではなく“愚直さ”、“美しさ”ではなく“Resilient”だと思います。

しかしながら、自分らしい美学を貫いて、しかも結果的に勝者になれるのであれば、それが最高なのかもしれませんね。サッカーのワールドカップもこのところ、2010年のスペイン、2014年のドイツのように、その年の大会で最も魅力的であったチームが世界チャンピオンに輝いています——、うーん、やっぱりカッコイイ。

▶▶ 次回リレートーク

佐々木 迅
QVCジャパン
取締役社長